

説教 「一人ひとりに聖霊の舌」

聖書 創世記 11:5~9/使徒言行録 2:1~4

「この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱(ハラム)させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである(創世 11:9)」。主はなぜ、世の言語を混乱させたのか。

人間が結託して不遜なことをし始めたから(11:4)、「互いの言葉が聞き分けられぬように(11:7)」したという。

この出来事を不幸と見るか、幸福と見るか、どちらにも解釈できよう。前者は民相互に無理解が生じたこと、後者は統一言語を強制する支配からの解放。どちらかという私は、後者の見方でこれを受け取っていた。ただ実際には、その両方があるだろう。

人と人との対立は、異文化間や異民族間だけに限らない。町や村にも、友情の内にも、教会共同体にも、あるいは家族の中にさえ「互いの言葉が聞き分けられぬ」無理解やいらだちは起こる。そしてひどい場合には、快復しがたい傷を負う。

「互いの言葉が聞き分けられぬ」ことと聖霊降臨は、まるで対照的。諸外国から帰郷した信心深いユダヤ人たちは(使徒 2:5)、「どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか(2:8)」と驚きとまどった(2:12)。このように故郷の言葉で「聞く(2:6,8,11)」ことは聖霊の働きか。

「一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した(2:4)」。それを酔っ払いのくだまきだと思ふ者もいた(2:13)。つまり聖霊に満たされてムニヤムニヤと語り、聖霊に満たされてムニヤムニヤを聞き取ったのだ。

ガリラヤの漁師だった使徒(2:7)が突然外国語を喋り出したのではなく、外国育ちの帰郷者が心の芯に響く母語で「神の偉大な業(2:11)」を聞いたのだ。

外国の市場を歩いていて、値切ったりボラれたり、粗悪品を買わされる体験はおもしろい。現地語は理解できなくても、しゃがみこんだオバサンたちの世間話は何となく分かる。

市場では、金と物の交換だけでなく心の交流が起こる。値切ったつもりでポツタクられていることも多いが、そういう時は去り際にオマケをくれる。翌日行くと前日より安くなり、三日目はニヤリと笑ってさらに安くなる。

聖霊降臨は、禍々しい、特殊な、あの時だけの出来事ではない。市場でのやりとりをいっそう深くしたような、私たちの身体感覚で「神の偉大な業(2:11)」を聞く(耳からではなく)ことではないのか。

聖霊の出来事を説明したり理解しようとする、言葉を尽くすほどにつまらない話になってしまう。

聖霊は「風」だが、この時はとりわけ「激しい風」が家中を響かせた(2:2)。「そして、炎のような舌が分れ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった(2:3)」。

注目すべきは、一人に一つずつ「舌」が与えられたこと。皆がひと塊になって熱狂したわけではない。「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す(ヨハネ 10:3)」と語ったイエスの言葉と共鳴する。個々の名が呼ばれるように、聖霊の舌が与えられ、私自身の言葉となる。

こちら側から見れば「賜物にはいろいろあるが、それをお与えになるのは同じ霊(1コリント 12:4)」。

賜物や言葉は違うが、私たちは一つの霊につながる一つの兄弟なのだ。聖霊に結ばれた弟妹が「私たち」の範囲。出会っていないけれども、私たちの兄弟姉妹は世界中にいる(使徒 2:9~11)。



《おまけのひとこと》

心の芯で私を揺さぶる言葉 母語はすでに私の身体になっている 身体言葉が他者を響かせるのは私に与えられた舌と彼らの舌が同根だから 異なる言葉を発し 共鳴し合う 霊は振動している